

○村木 優一¹

¹京都薬大

抗微生物薬耐性(AMR)は世界的な公衆衛生上の緊急事態として宣言され、拡大するパンデミックに対処するため、社会全体の行動を必要としている。AMR は疾病の長期化、伝搬リスクの増大、罹患率・死亡率の上昇を招き、結果的に財政的かつ社会的費用の増加も伴う。AMR の拡大の背景には、抗微生物薬の不適切な使用が指摘されている。このような状況のもと、世界各国で国家行動計画が策定され、我が国においても 2016 年 4 月に薬剤耐性 (AMR) 対策アクションプランが公表された。

我々は、経口のセファロスポリン系薬、フルオロキノロン系薬、マクロライド系薬の使用割合が他国と比較して高いことを明らかにした。また、日本における抗菌薬使用の 9 割が経口薬であることも明らかにした。これらの結果に基づき、薬剤師は入院患者だけではなく、外来患者に対しても主治医の抗菌薬使用を支援する必要性が示された。

Choosing wisely では、不必要な抗菌薬の使用についても言及している。薬剤師は、他の領域も含めてこうした考え方についても普及に努め、さらなる介入を実施し、評価しなければならない。本シンポジウムでは、我々がこれまでに得た日本における抗菌薬使用状況や取り巻く現状を示し、抗菌薬における賢明な選択に薬剤師がどのように関わっていくべきかについて言及したい。